

平成30年 8月30日現在

機関番号：22302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02789

研究課題名(和文) TOEFL Junior Comprehensiveは、大学入試に使えるか。

研究課題名(英文) Can we use TOEFL Junior Comprehensive for university entrance examination?

研究代表者

神谷 信廣 (Kamiya, Nobuhiro)

群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：70631795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：今回の研究においては、学習指導要領に沿った2技能試験(センター試験の英語)と、沿っていない4技能試験(TOEFL Junior Comprehensive)の間はかなり高い相関が得られた。また因子分析の結果でも、両者のテストが似たような能力を測定していることがわかった。つまり従来のセンター試験がTOEFLで測定するような英語運用能力を測定していることがわかった。これはTOEFL Junior Comprehensive以外の他の民間の4技能試験でも、十分にセンター試験の代わりになりうることを示唆する。

研究成果の概要(英文)：The present study showed a high correlation between the results of the two tests: the English section of Center Test and TOEFL Junior Comprehensive despite the fact that that, whereas the former measures two skills and follows the course of study published by MEXT, the latter measures four skills without the restrictions of the course of study. Moreover, the results of factor analyses indicate that these two tests are measuring similar constructs. Therefore, the English section of Center Test has been measuring English proficiency that has been measured also by such tests as TOEFL. This implies that other commercially available private English tests may be qualified to replace Center Test as well.

研究分野：第二言語習得

キーワード：センター試験 民間4技能英語試験 TOEFL Junior

1. 研究開始当初の背景

文部科学省や有識者会議により、センター試験の英語が廃止され、代わりに4技能(リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング)を測定する、既存の民間試験を導入する案が提案された。しかし、これには以下のような問題点が指摘されていた。

- (1) テストのレベルが難しすぎる。
例えば有識者会議が提案した「TOEFLへの一本化」に関して言えば、大半の高校生にとってTOEFLは難しすぎて差がつかず、選抜資料として不適切である。同様のことは、IELTS、TEAPなどにも当てはまる。
- (2) 幅広い習熟度のバンドを測る共通の試験がない。
高校生に幅広く受けられている英検には易しい級も存在するが、級毎に試験が異なるという特性上、公平性が求められる大学受験において、全ての高校生が等しく受ける試験としての運用には難がある。同様のことは、ケンブリッジ英検にも当てはまる。
- (3) 4技能を測定していない。
高校生向けの試験として、英検と並んで受験者数の多いGTEC for STUDENTSはスピーキングが入っておらず、文科省の意向にそぐわない。同様のことは、TOEFL Junior, TOEIC Bridgeなどにも当てはまる。
- (4) 値段が高い。
スピーキングの評価は訓練を受けた評価者が行うため、どうしても受験料が割高になる。
- (5) テスト会場が大都市に限られる。
準会場制度がない試験については、大都市でしか受けることができず、地方を含めた高校生が受けるには難がある。

そんな中で、TOEFL Junior Comprehensiveというテストが登場した。このテストは以下のような理由により、センター試験の代わりに大学入試で使用される可能性が高かった。

- (1) 中学生、高校生向けに作られていたため、問題の難易度が適切だった。
- (2) 4技能を測定している点、複数回の受験が可能であるという点が、文部科学省の方針と合致していた。
- (3) 有識者会議が提唱したTOEFLの流れを汲んでいた。
- (4) TOEFLで培われたデータを用いているため、公平性、妥当性、信頼性が高かった。
- (5) TOEFLとの関連性が高いことから、多くの生徒が受験する事により、英語圏の高校や大学への留学、あるいは直接大学

へ入学する生徒が増加することが期待された。

- (6) 当時、学校現場に浸透してきていたCEFRに対応していた。
- (7) 当時の受験料は、団体受験の割引を使わないと9,500円、割引を使うと8,640円と、TOEFLの\$230(約2万3千円)と比べて、かなり安価に受けられた。
- (8) テスト時間は2時間半程度で、TOEFLの半分程度で済んだ。
- (9) 当時は3会場(東京、名古屋、大阪)のみで公開テストが実施されていたが、3年以内に全都道府県での実施が計画されていた。
- (10) パソコンとインターネットがあれば、団体受験はどこでも受験が可能であった。

そこで当時、まだほとんど認知されておらず、研究もされていなかったTOEFL Junior Comprehensiveを研究対象として、それとセンター試験と得点の関係を調べることにした。

2. 研究の目的

有識者会議において、「4技能を測る資格・検定試験とセンター試験の得点換算表を作成」することが提唱されていた。よって本研究の第一の目的は、TOEFL Junior Comprehensiveとセンター試験の合計点数と各セクション(リーディング、リスニング)の点数の相関係数を明らかにすることにより、TOEFL Junior Comprehensiveがセンター試験のように、現在の高校3年生の英語の習熟度を一定以上の標準偏差を確保しながら適切に評価することができるのかどうかを検証することであった。

また、点数の相関が高いだけでは代替にふさわしいとは言えないので、両者のテストがどの程度同じ「英語の力」を測定しているのかを検証することが第二の目的であった。

3. 研究の方法

研究者の所属先の県内高校3年生、中等教育学校6年生、及び大学1年生の合計144名に参加してもらった。データの収集には2年間を要した。

まず全員に正式なセンター試験を1月に受験してもらった。点数は大学入試センターからの成績通知によって確認した。続いて大学生以外は3月に、大学生は5月にTOEFL Junior Comprehensiveを、研究者の所属する大学で受験してもらった。点数はETSからの成績通知によって確認した。

両者の点数を統計的に処理し、スキル毎の点数と合計点数の相関係数を求めた。両者のテストが測定している項目の比較の検証に、探索的因子分析(最尤推定)と検証的因子分析を行なった。

4. 研究成果

研究課題 1: センター試験の英語と TOEFL Junior Comprehensive の点数の間には、どのような相関関係があるか。

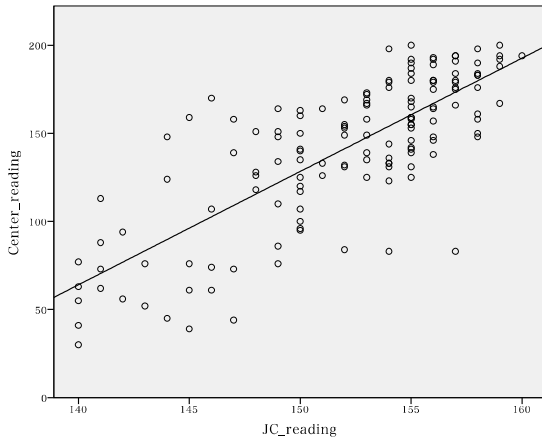


図 1 リーディングの点数の相関

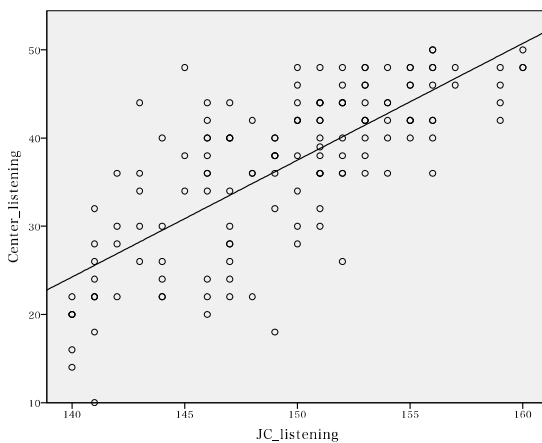


図 2 リスニングの点数の相関

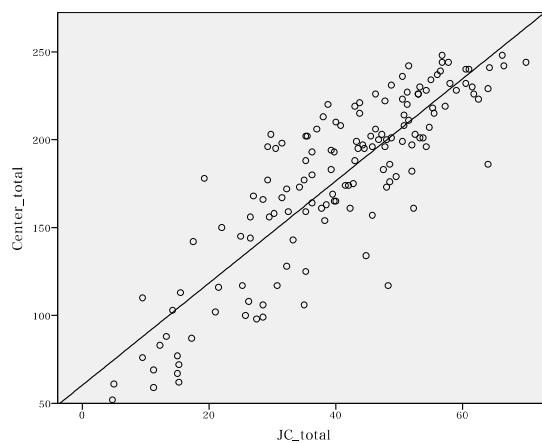


図 3 合計点数の相関

図 1-3 に見られるように、両者の点数には高い相関が見られた。リスニングは.78、リーディングは.75、合計は.86であった。

研究課題 2: センター試験の英語と TOEFL Junior Comprehensive は、何を測定しているのか。

探索的因子分析の結果、両者が同じような「英語の力」を測定している可能性が出てきた。そこで5つのモデルを仮説として設定し、検証的因子分析により、どのモデルが最もデータと適合しているかを調べた。その結果、モデル1(図4)とモデル2(図5)の2つのモデルが望ましいことが分かった。

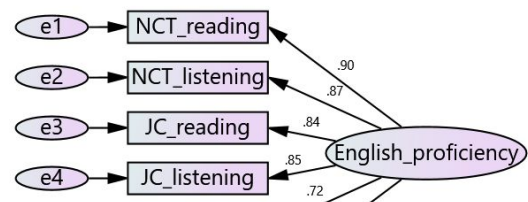


図 4 モデル 1 の結果

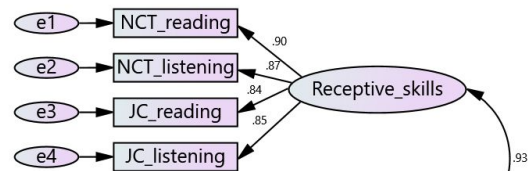


図 4 モデル 2 の結果

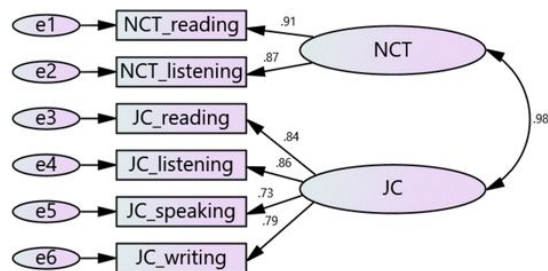


図 5 モデル 3 の結果

モデル1は、テストの種類や測定するスキルに関わらず、両者のテストは同一の「英語の習熟度」全般を測定していることを示す。モデル2は、テストの種類に関わらず、受容スキルと産出スキルを分けて測定しているが、その2つの間には、かなり高い相関があるので、あまり区別する意味がないことを意味する。結果的には、モデル2の方がモデル1よりも若干良いので、受容スキルと産出スキルを分けて測定する方が望ましいが、結果的に両モデルの間に大差はないことが分かった。

大切なことは、テストで分けるモデル3(図5)が、他の2つのモデルよりもデータとの適合が悪かったという点である。つまり、モデル1と2のどちらを選んだにしても、両者のテストは、似たような「英語の力」を測定しているということになる。またどちらのモデルでも、センター試験のリーディングの点数との相関が一番高く、その点数の81%は、「英語の力」によって予測することができた。簡単に言えば、センター試験のリーディングだけで、生徒の英語の力の8割を予測することができるということの意味する。言い換えれば、4技能試験を行わなくても、センター試験のリーディングの1技能のみの試験で、十分に生徒の英語力を評価できるということになる。

残念ながら、研究途中の2016年の12月末をもって、TOEFL Junior Comprehensiveが一旦中止となってしまった(現在復活の方向に向けて進んでいる)。そのため、センター試験の代替としての使用はできなくなってしまった。しかし測定する技能数(「2技能」と「4技能」)、学習指導要領による出題範囲の制限(「ある」と「ない」)、テストの目的(「英語が第一言語の国におけるコミュニケーション」と「大学入試」と3つの大きな相違点があるこれら2つのテストの間に、スキル別だけでなく、合計点数にまでも高い相関があり、かつ同じような項目を測定しているということは、特筆すべき発見である。今回、文部科学省に選定された民間試験のほとんどは学習指導要領に沿ったものではないが、今回の研究結果から、TOEFL Junior Comprehensive以外の4技能試験でも、同様の結果が出る可能性がある。今後は、文部科学省に認定された複数の4技能試験の点数を比較する研究が求められるだろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

Kamiya, N. (2017). Can the National Center Test in Japan be replaced by commercially available private English tests of four skills? In the case of TOEFL Junior Comprehensive. *Language Testing in Asia*, 7. doi:10.1186/s40468-017-0046-z (査読有)

[学会発表](計3件)

Kamiya, N. (2017年11月) What are we measuring in two English tests?: Japan's National Center Test and TOEFL Junior Comprehensive. *ALANZ (Applied Linguistics Association of New Zealand) annual conference 2017*. オークランド工科大学. 単独発表.

Kamiya, N. (2017年10月) What are we measuring in two English tests?: The National Center Test and TOEFL Junior

Comprehensive. *SLRF (Second Language Research Forum) annual conference 2017*. オハイオ州立大学. ポスター単独発表.

Kamiya, N. (2017年8月) Do we really need to measure four skills separately for university entrance examination?. *全国英語教育学会 第43回 島根研究大会*. 島根大学. 単独発表.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神谷 信廣 (KAMIYA, Nobuhiro)
群馬県立女子大学
国際コミュニケーション学部
英語コミュニケーション課程
教授

研究者番号: 70631795